登るのだ

境康隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
登るのだ

【Ｎコード】
Ｎ１０５６Ｑ

【作者名】
境康隆

【あらすじ】
そこにあるから登るのだ。だが私には困難なルートしか残されていなかった――

何故わざわざに困難に立ち向かうのか？
周りの人間はいつも私にそう問いかける。
もっと楽な方法があるのではないのか？　お前のしていることは無駄ではないのか？　たとえ目的を達成しても、それはただのお前の自己満足に過ぎないのではないのか？
私がそれに登ろうとする度に、周りはそう失笑混じりの視線を向けてくる。
なるほど確かに楽な道はある。皆と同じ道がある。
だがそのルートは多くの人間に既に踏破された道なのだ。
それは先人が切り開いてくれた道なのだ。
用意された道だ。そう、容易な道なのだ。
それに私が本当に目指したいのは未踏峰――
だが私にはそれはもう用意されていない。先達たちが既に多くの頂きに先に到達してしまっているからだ。
なら私のこの冒険心は何処で満たせばいいのか？
せめて未だ誰もなし得ていないルートで、それに登るべきなのではないのか？
少なくともそれが残されている以上、私はそのことに挑戦をせざるを得ない。
それは困難な道のりだった。何度アタックしても跳ね返される。
その度に私は滑落し、周りの人間に心配をされ、時に莫迦にされた。
多くの者が私を止める。多くの者が私を非難する。
だが私は怯まない。
そこにあるから登るのだ――
たしか先人はそう言ったと、私の先生が教えてくれた。
私もそうだ。そこにまだ未開のルートがあるから登るのだ。
勿論分かっている。どんなに楽なルートから登っても、見える景

色は同じだろう。同じ高さ。同じ風景。同じ空気だ。
だが経験は違うはずだ。やり遂げたという達成感は違うはずだ。
私はそう信じ、今日も困難なルートからその頂きを目指した。
その日も何度も足を滑らせた。何度体勢を整え直しても、その急なルートはやはり登るのには適していない。なるほど皆が楽な方を選ぶはずだ。道半ばで私は今更ながらそのことに思い知らされる。
しかし私は知っている。挑戦する度に、私は少しでも高く、頂き近くまで登れるようになっているのだ。
これだ。私はこの経験がしたかったのだ。そしてこの経験を本当に己のものにするためには、やはりこのルートを踏破し、頂きを制覇することが必要なはずだ。
私は歯を食いしばり、何度も何度も足を滑らしながら一歩一歩登っていった。
そしてついにその日、私はこの過酷なルートを攻略した。
やはり見える景色は同じだ。だがこの胸を満たす満足感は何ものにも代え難い。
私は今きた道を振りかえった。私の足跡が点々と着いている。私がこのルートを攻略した証拠だ。私が一歩一歩困難に立ち向かった印だ。
私は胸に込み上げてくるものを懸命に押さえて、この喜びを伝えるべく直ぐさま下界に向かった。
何よりこの喜びを一時でも早く知らせたい人がある。
私が先生と呼ぶ人だ。
そこにあるから登るのだ――
そのことを私に教えてくれた、まさに先生と呼ぶべき人物だ。
「先生――」
私は真っ先にその先生の下に駆け寄った。
「滑り台逆から登ったで！」
先生はもうダメでしょと言ったが、私は勿論大満足だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1056q/

登るのだ

2011年1月26日07時35分発行